

栗拾い

皇室の祭祀に用いられる大被祝詞には、天津罪、即ち、朝廷による民の処罰

対象に、「畦放」「溝埋」というのが書かれている。前者は水田の畔を崩すこと、

後者は、田に水を引く溝を埋めて灌漑用の水路を破壊することである。

いつの頃から水稻であったかは定かではないが、藤原氏の成立時には、日本は既に農耕であったことは明らかである。その前は狩猟、魚貝、植物等の採取であったろうから、自然の恵みを糧とした時代は長かったかも知れない。

考古学の遺跡調査によれば、縄文時代は一万六千年ほど遡れる長い時代である。時代は連続しているから、狩猟、採取と農耕は、地域分布の差に過ぎないように筆者には思える。新しい発見により、縄文時代と農耕の弥生時代の境目は無くなっている。通説を覆し、稲作は日本から朝鮮に伝わったようだ。

筆者が住む集落には神社があるのだが、参道を少し外れて森の中に分け入ると栗が落ちてている。そこで、夕方に山栗を拾いに行った。その時に思ったのは、狩猟と採取の時代は人々が野蛮であったわけではない。現代の様な生きやすさは無かったが、集落があり自然の豊穡は人々に十分にあったのだと、フト思った。山栗は当然、一様には落ちていない。ある特別の場所に群生しているのだが、大方は鹿が先に食べてしまっている。鹿との競争だから、しかたない。

残された、開き切った毬栗には、残念だが栗は、あまり無い。少しの収穫を持って家に帰った。明日は早朝に行ってみよう。

了

令和二年十月九日

大中臣 正比呂

